

Title	国際政治研究におけるプロスペクト理論：方法論的問題と理論的含意
Sub Title	Prospect theory in the study of international politics : methodological problems and theoretical implications
Author	伊藤, 隆太(Ito, Ryuta)
Publisher	慶應義塾大学大学院法学研究科内 『法学政治学論究』 刊行会
Publication year	2013
Jtitle	法學政治學論究：法律・政治・社会 (Hogaku seijigaku ronkyu : Journal of law and political studies). Vol.98, (2013. 9) ,p.103- 132
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10086101-20130915-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

国際政治研究におけるプロスペクト理論

——方法論的問題と理論的含意——

伊藤 隆 太

- 一 はじめに
- 二 プロスペクト理論の論理
- 三 国際政治学におけるプロスペクト理論研究の歴史
- 四 国際政治理論研究への含意
 - (一) リアリズム
 - (二) 予防戦争論
 - (三) 抑止と強制
 - (四) 理論的含意の批判的再検討
- 五 適用における方法論的問題
 - (一) 集合問題
 - (二) フレーミング理論の欠如
 - (三) 方法論的問題の批判的再検討
- 六 今後の研究の可能性
 - (一) 国際政治研究におけるプロスペクト理論の分析射程の範囲
 - (二) 研究を進める三つの方向性
- 七 おわりに

一 はじめに

プロスペクト理論が国際政治分析に適用され始めてから二〇年余りが経つ。さまざまな理論・方法論的問題を抱えつつも、プロスペクト理論は次第に国際政治研究の重要な分析道具として定着してきた⁽¹⁾。また近年の自然科学分野における情動をはじめとしたプロスペクト理論に関連する実験研究⁽³⁾（特に神経生理学・進化生物学の分野）の進展は、プロスペクト理論が人間の意思決定をより現実的に分析できることを示唆している⁽⁴⁾。

しかし、一部の例外を除いてこれらのさまざまな実験研究の成果が、国際政治学におけるプロスペクト理論研究にもたらず重要な含意に関して、十分に考察されてきたとは言いがたい⁽⁵⁾。どのようにして、情動的要因をはじめとする実験研究の進展を国際政治学におけるプロスペクト理論研究にいかせばよいのだろうか。このような問題意識に基づいて本稿の目的は、最新の知見を踏まえて国際政治学におけるプロスペクト理論の理論・方法論的問題を再検討することにある⁽⁶⁾。

レヴィ (Jack S. Levy) は、国際政治研究における本理論の内的妥当性、外的妥当性の議論を通じて国際政治分野のプロスペクト理論研究の基盤を築いた⁽⁷⁾。日本では、土山が事例研究を通じてプロスペクト理論の体系的な紹介を行っている。久保田は、本理論を国際政治学に導入する際の理論・方法論的問題を考察して、解決方法と研究上の課題を示した。本稿ではこれらのすぐれた先行研究に立脚しながらも、国際政治研究にプロスペクト理論を適用する際の理論・方法論的問題を改めて検証する。先行研究において十分に論じられてこなかった、情動的要因をはじめとする実験研究の進展が国際政治学におけるプロスペクト理論研究にもたらず含意に関して掘り下げて分析することで、新たな研究の可能性を考察する。先行レビューではプロスペクト理論研究に情動的要因を取り入れることは方法論的に困

難であると指摘されてきた。⁽⁸⁾ 本稿では情動的要因を取り入れることを通じて国際政治学におけるプロスペクト理論研究のさらなる進展が可能になることを再検証したい。

本稿の構成は以下の通りである。第二章ではプロスペクト理論の概要を説明する。第三章では国際政治学におけるプロスペクト理論研究の歴史を論じる。第四章では国際政治理論研究への含意、第五章では方法論的問題とその解決方法、を批判的に再検討する。第六章では第五章までの議論を踏まえて、今後の研究の可能性を考察する。第七章では本文で展開した議論を簡潔に整理した後、本研究の含意と今後の課題を示す。

二 プロスペクト理論の論理

カーネマン (Daniel Kahneman) とトヴェルスキー (Amos Tversky) が構築したプロスペクト理論は、期待効用理論、合理的選択理論からの逸脱事例をリスクの選択という観点から説明する個人の意思決定理論である。プロスペクト理論において人々の選択は、編集 (editing) と評価 (evaluation) という二つの局面に大別される。前者は選択された問題を簡略化するための先行的な分析がなされる局面であり、意思決定における具体的な選択肢が選ばれるための枠組みが作られる。後者は編集された見込みが評価されて、望ましい見込みが選択される局面であり、価値関数 (value function) や決定荷重関数 (decision weight function) の効果を通じて具体的な選択が決まる。⁽⁹⁾ 編集の局面は複数の心理的な操作によって構成されて、これらには帰結と蓋然性の表現を転換することにより、その後の評価・選択を簡略化する役割がある。⁽¹⁰⁾ 評価の局面では意思決定者は価値関数、決定荷重関数を通して編集された見込みを評価して、最も価値の高いオプションを選択する。人々の意思決定に関して、期待効用理論や合理的選択理論が規範的モデルを提示するのに対して、プロスペクト理論は記述的・予測的モデルを提示する。以下、簡潔ではあるがプロスペクト理論の

論理を主に価値関数、決定荷重関数という二つの観点から説明する。

価値関数は人々の意思決定行動に関して四つの特徴を提示する。第一は参照依存 (reference dependence) である⁽¹¹⁾。人々は富の総量ではなく、中立的な参照点 (reference point) からの逸脱という観点に基づいて獲得と損失を評価する。カーネマンとトヴェルスキーはプロスペクト理論における参照点の規定要因として、利用可能性 (availability)⁽¹²⁾・代表性 (representativeness)⁽¹³⁾・アンカリング (anchoring)⁽¹⁴⁾ という三つの判断のための方法 (judgmental heuristics) を挙げている⁽¹⁵⁾。また参照点は一般的に意思決定者の現状に関する主観的な理解と前提されるが、同様に欲求 (aspiration)、期待水準 (expectation level) によっても規定される⁽¹⁶⁾。第二はリスク傾向性である。S型の価値関数は参照点の上方において凹型、下方において凸型を描き、参照点周囲における鏡映効果 (reflection effect) によって個人の意思決定におけるリスク傾向性、すなわち、獲得のドメイン (domain)⁽¹⁷⁾でのリスク回避 (risk averse) と損失のドメインでのリスク受容 (risk acceptance)⁽¹⁸⁾を示す。第三は損失回避 (loss aversion)⁽¹⁹⁾である。価値関数において獲得のドメインの曲線の勾配よりも損失のドメインの勾配の方が大きいことは、人々の損失回避への傾向を示す。また損失回避と関連する概念として授かり効果 (endowment effect)、現状維持バイアス (status quo bias)⁽²⁰⁾がある。前者は将来獲得するものよりも既に保有しているものに高い価値をおく傾向、後者は変化より現状の維持を望む傾向を示す。それゆえ、所有物を手放すことの極小の対価・売値はしばしば、同等の商品購入に支払う極大の対価・買値の数倍高くなる。さらに瞬間的な保有効果 (instant endowment effect) によって人間は認識上の獲得に対して迅速に適応する一方、はじめに保有していた財の損失には容易に適応しない⁽²¹⁾。また感応度逓減 (diminishing sensitivity) によって価値関数上の曲線は獲得と損失のドメイン双方において、絶対値が小さいうちに変化に敏感であるがそれが大きくなるにつれて、変化に対して鈍感になる⁽²²⁾。それゆえ、人々にとって「獲得よりも損失が大きく映る (losses looms larger than gains)⁽²³⁾」のである。第四は選好逆転 (preference reversals) である。選好逆転は選択肢の間の選好順位が選好を決める異なる手法の間で相違する現

象を意味する。参照点の移動とフレーミング効果 (framing effect)⁽²⁵⁾ は、等しい価値の選択肢の間で選好逆転を引き起こす⁽²⁶⁾。選好逆転がアレのパラドックスやフレーミング効果と異なる点は、狭義の選好逆転では選択肢の記述自体に変化はなく選択順位の決定手法が変化している点にあるといえる。

価値関数に加えて、プロスペクト理論において客観的な確率は決定荷重関数に置き換えられて評価される。第一に関数上の曲線は、①低い客観的な確率が主観的には過大評価されて、②中程度以上の客観的な確率は主観的に過小評価されることを示す⁽²⁷⁾。第二に個人の主観的な蓋然性は損失と獲得のドメインによって異なり、前者において小さな確率に敏感で大きな確率に過小評価の度合いが低い。また後者において小さな確率の過大評価が小さい一方、大きな確率の過小評価が高い⁽²⁸⁾。第三に確実性効果 (certainty effect)、疑似確実性効果 (pseudocertainty effect) は人々が事象の生起に関して蓋然性より確実性を好むことを示す⁽²⁹⁾。確実性効果は人々が不確実な事象の生起確率の低減よりも、確実に起こる事象の生起確率の低減を望むことを意味する。また疑似確実性効果は人々を不確実性が軽減する選択肢よりも、確実に思わせてくれる選択肢を選ぶ方向にわかせる。すなわち、確実であるという知覚が同じ確率をもつ問題の選択に影響を与えて、確率に対する評価は客観的に得られる数値ではなく、主観的な評価で修正される。

このように、プロスペクト理論における価値関数と決定荷重関数は意思決定者の選択を帰結の価値と決定荷重の融合的なものとして示すことで、期待効用理論、合理的選択理論からの逸脱事例を説明可能にしている。

三 国際政治学におけるプロスペクト理論研究の歴史

一九九二年に *Political Psychology* (第二三巻) で特集がなされて以来、プロスペクト理論は国際政治学に積極的に適用されるようになってきた⁽³⁰⁾。一九九七年にレビは合理的選択理論との比較を通じて、方法論的問題と国際政治研究

への含意を体系的に示した。⁽³¹⁾ 初期の研究の分析領域は安全保障分野が中心であった。マクデーモット (Rose McDermott) はイランの米国大使館人質救出作戦の分析を行った。カーターは国際的・国内的な観点から、自身を損失のドメインに在るよう認識していた。マクデーモットは人質救出作戦の政策決定が損失のドメインでなされたことを、カーターが直面していた国内外の指標に基づいて説明する。革命的なイスラム勢力による人質五三人の拘束とカーターとの直接交渉の拒絶、批判的な世論の下での再選運動、人質の安全に関する悲観的観測、国内における人質解放の要求、衰退する国際的威信と信頼性がその指標である。⁽³²⁾ また、プロスペクト理論は絶対的利得と相対的利得に関するネオリアリズムとネオリベラリズムの間の論争 (ネオ・ネオ論争⁽³³⁾) を解決する方途を提示した。ベレジキアン (Jeffrey D. Bejickian) は国家の追求する利得の特性に注目してドメインにより絶対的利得と相対的利得のいずれが重視されるかが規定されると論じた。国家は求める利得に関して獲得のドメインでは絶対的利得、損失のドメインでは相対的利得を重視する。⁽³⁴⁾ 二〇〇四年に再び *Political Psychology* (第二五巻、第二、三号) でプロスペクト理論の特集がなされて、一〇数年にわたる研究の成果が多角的に論じられた。定性研究に関して、タリアフェロ (Jeffrey W. Taliferro) はプロスペクト理論を期待水準理論およびリアリズムと融合した外交政策理論を提示した。⁽³⁵⁾ フォーマル・モデル研究に関して、カンナー (Michael D. Kanner) は不完全情報下の戦略的相互作用を説明する交渉モデルを提示した。⁽³⁶⁾ 抑止理論に関して、シャウプ (Gary Schaub Jr.) は期待効用理論とプロスペクト理論を比較しつつ、抑止と強制を区別する数理研究を行った。⁽³⁷⁾ マクデーモットは一〇年余りにわたる国際政治学におけるプロスペクト理論研究の成果を検討した後、今後の課題として集合問題 (aggregation problem)、⁽³⁸⁾ フレーミング理論、情動の問題を指摘した。⁽³⁹⁾ この時期の研究の進展の傾向は、以下の二点にまとめられる。第一は方法論・アプローチの多様化である。たとえば、同じ抑止理論研究でもシャウプは数理的アプローチ、デイビス (James W. Davis) は定性的アプローチに基づいて、⁽⁴⁰⁾ プロスペクト理論を国際政治分析に適用している。第二は適用領域の拡大である。国際政治学への応用分野は従来の

安全保障分野を越えて、国際政治経済⁽⁴¹⁾、環境問題へと拡大した。

二〇〇五年にはメーサー (Jonathan Mercer) がフレーミング効果に関するすぐれた論考を執筆した。期待効用理論が選好の起源に関する理論を欠くと同様に、プロスペクト理論は参照点の起源 (すなわちフレーミング効果の起源) に関する理論を欠く。このことを研究者はフレーミング理論の欠如 (lack of a theory of framing) として問題視してきた⁽⁴³⁾。これに対してメーサーはドメインの決定に影響を与える代表的な概念として、現状 (status quo)、欲求、ヒューリスティクス、アナロジー (analogy)、情動 (emotion) の五つを挙げて包括的な分析をした⁽⁴⁴⁾。二〇〇八年にはルボウ (Richard Ned Lebow) が、動機 (motive) に着目したプロスペクト理論研究を提示した。ルボウはアクターの動機とコンテクストが、プロスペクト理論を国際政治分析に適用する際に重要であると指摘する。動機とコンテクストはドメインを規定する。たとえば、第一次世界大戦をプロスペクト理論で分析する際には、欲求 (appetite)、恐怖 (fear)、精神 (spirit) という三つの動機と、帝国主義 (imperialism) というコンテクストが重要である。同事例において、精神に動機付けられたアクターは獲得のドメインでもリスクのある行動を好む。なぜなら、リスクを受け入れるという行為それ自体が、名譽の維持に不可欠だからである。ルボウは動機によってはアクターが獲得のドメインでもリスクのある行動を好むと論じることで、オリジナルのプロスペクト理論を大胆に修正した研究を提示した⁽⁴⁵⁾。

二〇一〇年には、メーサーが神経経済学の進展を受けて発展したプロスペクト理論を国際政治分析に適用した。従来、プロスペクト理論はアクターへの外的刺激とその反応を分析する認識理論として把握されており、感覚をはじめとする情動の問題を論じることは困難とされていた。これは二〇〇四年にマクデーモットが指摘した通りである。しかし、メーサーは二つの観点からプロスペクト理論が国際政治の情動的要因を分析できると主張した。第一に情動はアクターのリスクと効用の判断に影響を与える。人々は事象の判断を理性的な思考のみならず直感的な感覚 (feeling)⁽⁴⁶⁾ に基づいて行う。たとえば、個人の科学技術に対するリスクの評価には、好き嫌いといった情動が影響を

与える。個人は「嫌い」な科学技術に高いリスクを感じて、「好き」な科学技術を信頼する。第二はフレイミング効果への情動の影響である。情動は個人のリスク評価に影響を与える。⁽⁴⁷⁾ 国際政治のプロスペクト理論研究の分析射程は情動的要因まで拡大した。二〇一三年、ヒトフェン (Kai He and Huiyun Peng) は政治的正当性 (political legitimacy) を分析概念として用いて、プロスペクト理論をネオクラシカル・リアリズム (neoclassical realism)⁽⁴⁸⁾ に導入した。⁽⁴⁹⁾ 彼らが構築した政治的正当性・プロスペクトモデル (political legitimacy prospect model) において、国家の対外政策は国際システムの因果効果が国内外の政治的正当性の状態に関する指導者の認識を媒介する形で決定される。この際、指導者の政治的正当性の認識が媒介変数であり、それには参照点および国家行動のリスク傾向性を規定する役割がある。⁽⁵⁰⁾ ヒトフェンの功績は国際政治のプロスペクト理論研究が分析レベルの問題に自覚的な形で参照点を決められることを示した点にある。

四 国際政治理論研究への含意

本章では、プロスペクト理論が国際政治理論研究に与えるさまざまな含意の中から、主なものとして、リアリズム、予防戦争論、抑止と強制という三つを挙げて考察する。

(一) リアリズム

プロスペクト理論は国際関係理論のリアリズム研究を進展させてきた。以下二つの研究例を紹介する。ヒトフェンのプロスペクト脅威同盟モデル (prospect-threat alliance model)⁽⁵¹⁾ と、タリアフェロのリスク均衡理論 (balance of risk theory) ⁽⁵²⁾。

プロスペクト理論は、ディフェンシブ・リアリズムの代表的理論である脅威均衡理論 (balance of threat theory)⁽⁸³⁾ の説明力を拡張する。プロスペクト脅威同盟モデルは、獲得と損失の見込みに関する脅威 (threat) を参照点として、第二次世界大戦後のアメリカの同盟行動をリスク概念に依拠して説明する。国際システムのアナーキーという不確実な状況下で、同盟行動は単独行動よりもリスクが高い。第一に同盟行動は国家の安全保障に有用であるが、同盟国の損失に由来する高いリスクを伴う。第二に同盟国はしばしば国家の行動の自由を奪い政治的・軍事的制約という損失となる。それゆえ、国家は同盟形成を通じた外的均衡化 (external balancing) よりも、動員・軍備を通じた内的均衡化 (internal balancing) に基づく単独行動を愛好する⁽⁸⁴⁾。同盟行動に関してひとフェンは外的脅威に直面する国家に可能な選択肢には、二国間同盟と多国間同盟という二つがあると前提する。多国間同盟の最善の帰結は多角的な軍事支援の獲得であるが、軍事的・政治的な多くの制約を被るリスクを付随する。一方、二国間同盟は同盟数の増加による利益の獲得にも関わらず、政治・軍事的な制約が少ないため相対的にリスクは低い。それゆえ、他の全ての条件が等しければ、同盟国の増加はリスクを増大させる⁽⁸⁵⁾。

他方、タリアフェロはプロスペクト理論をディフェンシブ・リアリズムに導入して、国家の外交政策 (周辺への介入) を説明・予測する理論を構築する。主な特徴は以下の三点にある。第一に期待水準・目標設定理論の実験研究に基づいて参照点は期待水準・欲求に規定される⁽⁸⁶⁾。アクターは過去・現在のみならず将来の国際システムの情勢にも関心を払う。第二に経済学的なリスク概念の定義は忌避される⁽⁸⁷⁾。リスクは「行動および行動の不在が、超大国自身の行動、敵国、第三国の反応、その他、外生的な出来事に起因して、重大な損失に帰結する状況」と定義される⁽⁸⁸⁾。タリアフェロはリスク回避・受容の二分法的な解釈を否定してリスクの主観的認識を重視する⁽⁸⁹⁾。第三は国家の対外行動の因果モデルである。リスク均衡理論は、①独立変数に相対的パワー、国際的状况および地位の予期された変化、②媒介変数に指導者による期待水準の選択、③従属変数にリスク負担行動の変動を仮定する⁽⁹⁰⁾。タリアフェロはプロスペクト

理論を広義の意思決定理論と捉えて、サンクコスト、コミットメントのエスカレーションを説明可能にするリアリスト理論を構築した。

(二) 予防戦争論

プロスペクト理論は予防戦争の論理に理論的根拠を与える。国際政治研究において予防戦争は歴史研究・理論研究双方における重要な分析概念であるが、しばしばその定義が曖昧であると批判される⁽⁶¹⁾。方法的に予防戦争は合理的選択アプローチ⁽⁶²⁾、心理学的アプローチ(特にプロスペクト理論の損失回避⁽⁶³⁾)の双方で論じることができる。それゆえ、予防戦争の理論的根拠に関して研究者の間で十分なコンセンサスがあるとは言いがたい。本稿では予防戦争論が方法的に心理学的アプローチ、理論的にはダイフェンシブ・リアリズム⁽⁶⁴⁾の論理に整合的と前提して、簡潔にプロスペクト理論がもたらす含意を説明する。

ダイフェンシブ・リアリズムによれば、予防戦争は脆弱性の窓が開く際に起こる。この際、脆弱性の窓は国家の相対的パワーの衰退に由来して、安全保障の確保が困難となる状況を意味する。脆弱性の窓は衰退する国家に予防戦争の誘因を付与する。脆弱性の窓が開いているとき、衰退国は敵対国とのパワー関係が最も劣勢であると認識して、自国の存続の恐怖から脅威の対象を攻撃する。すなわち、衰退国は状況が決定的に劣勢になる前に、リスクを受け入れて予防戦争に訴えるのである。予防戦争の主な勃発要因は、第一に衰退国の劣勢な地位に乗じた敵国による自国に不利なバゲニングの強要を回避する選択、第二に敵国とのパワーの差が明確な最悪の条件下で戦争を仕掛けられることとの回避という二つの要因に大別される⁽⁶⁵⁾。また、予防戦争の動機は自らの軍事力および潜在的能力が勃興しつつある敵国と比べて弱体化しており、継続する衰退によって重大な事態に直面するという恐怖を政策決定者が抱くことに起因する⁽⁶⁶⁾。プロスペクト理論はこのような衰退する国家が、損失のドメインにいると指摘する。衰退する国家が継続す

る国益の損失に起因する自国の滅亡という決定的な損失を回避するため、あえて戦争の危険を冒すという行動は、プロスペクト理論における損失回避の論理と整合的である。すなわち、国家は損失のドメインにおいてリスクを受け入れる行動をとるのである。

(三) 抑止と強制

プロスペクト理論は多様な状況下における抑止・強制政策の帰結を予測する。シェリング (Thomas C. Schelling) は他国が既に開始した行動を止めるよりも、行動を事前に抑止する方が容易であるため、抑止は強制より容易であると主張する。⁽⁶⁷⁾ プロスペクト理論はこの抑止と強制に関する論理に新たな分析視角を与える。抑止が強制より容易であるという理由は、抑止が相手国による将来の獲得の否定を要求することを意味する一方、強制が過去の行動の解消・現在の行動の中止を迫ることで相手国に損失を受け入れる要求となることにある。それゆえ、プロスペクト理論は相手国をとる行動の予測に関して、抑止の際に現状維持というリスク中立・回避的な行動、強制の際にリスクを受け入れる行動を予測する(抑止・強制のいずれも成功した場合に関して)。もともと、この予測は相手国が現状を参照点と規定した場合に限定される。仮に相手国が参照点を現状よりも上位に置いている場合(たとえば、篡奪された領土の奪還)、現状は不満足となり(損失のドメイン)、現状に留まることを要求する抑止は相手国にとって、獲得の否定ではなく損失を受け入れることを意味する。それゆえ、抑止・強制双方に際して損失のドメインにいる相手国はリスクを受け入れる行動をとるため、強制のみならず抑止もリスクの高い対外政策となる。プロスペクト理論の参照点という発想は、抑止が強制よりも容易であるというシェリングの仮説を洗練するのである。⁽⁶⁸⁾

(四) 理論的含意の批判的再検討

本章ではプロスペクト理論の国際政治理論研究への含意を、リアリズム、予防戦争論、抑止と強制、という三つの観点から説明した。以下、紹介してきた各々の理論的含意を批判的に再検討する。リアリズムに関しては二つのモデルを紹介した。まず、ヒトフェンが提示したプロスペクト脅威モデルであるが、このモデルは、同盟国の数とリスクの変動に関する推論に再検討の余地がある。前述のようにこのモデルでは、二国間同盟が多国間同盟よりもリスクが低いと仮定している。しかし、リアリズムのパラダイムでは国家はアナキーの下で他国の意図に関して不確実な状態に置かれる。他国の意図の不確実性を鑑みれば、同盟国を一国に限定するよりも複数国にした方がリスクを分散できるため、リスクが低いという論理も考慮すべきであろう。他方、タリアフェロのリスク均衡理論は政策決定者が重視する価値として、物質的要因（相対的パワー）と観念的要因（威信、国際的地位など）の双方を挙げているがこれらの相対的重要性が曖昧である。もちろん、政策決定者の認識的要因を扱う際に物質的要因と観念的要因を完全に区別することは困難である。また、双方の要因を用いて事例解釈を行うことで説明力は増加する。しかし、多くの要因を因果モデルに導入することで理論の簡潔性が失われる点には留意する必要があるだろう。

予防戦争論の問題点は政策決定者が①予防戦争の開始、②衰退の継続、のいずれを高いリスクと把握するかを評価することが難しいことにある。選択の帰結に関する利得が期待効用理論の基準から決定困難なとき、アクターのリスクを受け入れる行動の説明・予測は困難である。この問題の根本的な原因は、価値とリスクの定義が不明確なことである。予防戦争論を洗練するためには、①衰退国の政策決定者が重視する価値、②リスク概念の操作化の二つを再検討する必要があるだろう。抑止理論も予防戦争理論と同様の問題を抱えている。研究者は被抑止・被強制国の指導者が重視する価値を明確にする必要がある。

五 適用における方法論的問題

本章では国際政治研究へプロスペクト理論を適用する際に、批判として挙げられる二つの主な方法論的問題を論じる。

(一) 集合問題

プロスペクト理論は元来、個人を分析単位とした意思決定理論であるため集团的意思決定への適用可能性に関しては論争がある。レビはプロスペクト理論を集合的アクターである国家行動の分析に適用する際の方法論的問題として集合問題を指摘する。⁽⁷⁰⁾ それでは、仮にプロスペクト理論を国際政治研究に適用することが、方法論的に許容可能ならば、どのような分析手法が有用なのだろうか。第一は個人の意思決定に適用するという方法である。フアーマン (M. Fuhrmann) とアーリー (B. R. Early) は戦術核兵器削減のための一方的宣言 (Presidential Nuclear Initiatives: PNIs) の研究でプロスペクト理論を用いて、PNIsを行った際のブッシュ大統領のリスクを受け入れる意思を説明する。ブッシュ個人の政策決定に分析の焦点を当てることで、彼らは集合問題を克服してアメリカの核兵器に関する対外政策決定を説明する。⁽⁷¹⁾

第二はカウフマン (Chaim D. Kaufmann) が提示した分析アクターをエリート政策決定集団に絞るという前提の援用である。カウフマンの主張は以下の推論に依拠している。それは、①合理的選択アプローチの予測によれば仮に研究者が、アクターが全て同一、または少なくとも類似的な情報へアクセスすることができると仮定するならば、それは予測上のどのような信念の更新 (update) も、その集団の全てのメンバーの間で同期して (unison) 起こる、②しか

し、現実には政策決定者が同一の情報に対して異なる信念を採用する場合がある、③それゆえ、この原因の説明には消極的理由ではあるが、個人的・心理的バイアスが重要となるであろう、という論理である。⁽⁷²⁾

(二) フレーミング理論の欠如

広義にフレーミングとは人間が外的環境を理解する過程を意味する。人間はさまざまな認識的・感情的・社会的なフィルターを通して情報をインプットして、外的環境に関する情報を認識する。このようにして構築された現実世界の認識はさまざまな意思決定と行動に影響を与える。フレーミング過程は外的環境が曖昧かつ不確定であるために必要とされる。人間は認識能力には限界があるため情報の認識を選択的に行うのである。⁽⁷³⁾

プロスペクト理論におけるフレーミングの意味はより狭義であり、「特定の選択に関連する行動・帰結・偶然性に関する意思決定者の概念」と定義される。⁽⁷⁴⁾我々は予測に際して、ドメインに基づいて帰結に関する選択肢を理解する。カーネマンとトヴェルスキーは獲得と損失のドメインに被験者を置いて実験環境を操作する。被験者に獲得・損失のドメインを表す情報を提示することにより、彼らは選好逆転現象(ドメインに応じた選好の変化)を発見した。このように心理学者は統制された環境の下に被験者において実験を行う。しかし、実験室の外で人々が直面する環境はさまざまである。すなわち、プロスペクト理論は現実世界における人間のドメインの推定に関して、一般的な因果関係を提示できないのである。たとえば、世論調査やアンケートなどでは内容が同じでも質問の提示の仕方によって、全く異なった結果となる場合がある。しかし、プロスペクト理論はこれらの理由に関する一般的な因果関係を示せない。⁽⁷⁵⁾研究者はこの問題の解決にさまざまな方法で取り組んできた。それらは大別すると二つの理念型に分けられる。第一は客観的指標によるドメインの推定である。この指標の例には世論調査、議会における反対票の数、株式市場指数、インフレーション、失業率といった経済指標、新聞の論評が挙げられる。⁽⁷⁶⁾たとえばマクドモットは湾岸危機を事例

として、イラクと紛争中のブッシュ政権の参照点がクウェートの主権国としての独立にあったと主張する。イラクによるクウェートの侵攻はブッシュ政権に損失と評価される。この際、湾岸危機における「砂漠の嵐」作戦を開始するとき、ブッシュ政権の意思決定のドメインが損失にあったことは、①サダム・フセインの行動がサウジアラビアの石油供給に及ぼすリスク、②湾岸における軍事紛争による潜在的損失がアメリカの必要とする石油供給に与える脅威、③サウジアラビア、イスラエルといったアメリカの諸同盟国が分裂するリスク、④戦争をエスカレーションさせるようなイスラエルの単独介入のリスク、⑤生物化学兵器、場合によっては核兵器が使用される脅威、⑥冷戦後の新国際秩序を形成するリーダーシップを米国が失うかもしれないという脅威、という六つの問題を指標にして説明される⁽⁷⁷⁾。また、国際経済分野の研究は、安全保障分野と比べて相対的にドメインの推定が容易である。第一に国際経済ではさまざまな経済指標をドメインの推定に利用できる。たとえばエルムズ (D. K. Elms) による貿易紛争の研究は市場の需要を指標として利用することで、ドメインが比較的容易に決められることを示している⁽⁷⁸⁾。第二に利益集団は外国市場へのアクセスを望むため、国際貿易の紛争状況は損失のドメインであると前提することができる。これらの例にはフアニス (M. Fannis) の企業間協調⁽⁷⁹⁾、マスタンドゥノ (M. Mastanduno) の日米間の構造協議交渉⁽⁸⁰⁾、スパーク (D. Spar) の戦闘機開発における日米間協調⁽⁸¹⁾、の研究がある。

第二は主観的な評価によるドメインの推定である。これは覚書、インタビュー、公文書をはじめとする一次・二次文献の解釈に基づくものである。たとえば、第一次世界大戦にいたるドイツの状況を多くの研究者は、一九〇四年の英仏協商の成立以降、損失のドメインと解釈する。ただしドメインを規定する具体的な参照点は事例の解釈の仕方によって異なる。たとえばデイビスは一九〇五年のモロッコ危機に際して、ドイツが一八八〇年のマドリッド条約締結時点の現状を参照点としていたと主張する⁽⁸²⁾。他方、タリアフェロは同時期ドイツが英仏協商の分断を参照点としていたと主張する⁽⁸³⁾。

(三) 方法論的問題の批判的再検討

本章では、集合問題、フレーミング理論の欠如、という方法論の問題とその解決方法を説明してきた。以下、これらの解決方法への反論を検討することで方法論の問題に関して掘り下げた分析を行いたい。集団意思決定研究は指導者・エリートの参照点の分析を通じて集合問題が克服できることを示唆している⁽⁸⁴⁾。しかし、以下の二つの問題には注意を払う必要がある。第一に分析アクターの個性の問題である。実験研究が示すように個人のリスク傾向性には個体差が大きく影響を及ぼしており、その予測能力は六〇%〜八〇%程度である⁽⁸⁵⁾。それゆえファーマンによる個人の意思決定に注目する手法は、分析対象とする個人が強力な個性を有する特殊な事例には適用困難といえる。第二にエリート政策決定集団の集団思考 (group thinking⁽⁸⁶⁾) が、必ずしもプロスペクト理論の示すリスク傾向性を反映していないかもしれない点である⁽⁸⁶⁾。

また国際政治学はドメインの推定に関する一般的な法則を発見していない⁽⁸⁷⁾。客観的指標に着目する方法の問題点は以下の二点にある。第一は誤認識 (misperception) の問題である⁽⁸⁸⁾。外的環境と政策決定者のドメインが一致するとは限らない。第二は価値の主観性の問題である。客観的指標の相対的な重要性はアクターが重視する価値によって異なるだろう。主観的解釈によるドメインの推定に際する問題点は事例解釈の信憑性にある。これは研究者が自らの仮説に沿った観察を行うことで、事例解釈が恣意的になる危険を意味する。この問題に対処するために研究者は一般的な歴史解釈 (正統派、修正主義など) との比較を通じて、自身の解釈の学術的立場を明示化する必要があるだろう。

六 今後の研究の可能性

本章では今後の研究の可能性を論じる。はじめにこれまでの議論を踏まえて、国際政治分野におけるプロスペクト理論の分析射程の範囲を論じる。次いで今後、分析射程を広げていく研究の可能性に関して掘り下げて分析したい。

(一) 国際政治研究におけるプロスペクト理論の分析射程の範囲

本節ではプロスペクト理論の国際政治研究における分析射程の範囲を、分析対象の範囲（現象および要因）、適用における限界、今後の課題、という三つの観点から論じる。第一に分析対象の範囲に関して、適用初期は安全保障分野の現象（たとえば、戦争、軍事介入）が中心であった。その後、国際政治経済、環境問題といった非安全保障分野の現象まで分析射程は広がった。⁽⁸⁹⁾ 現在では実験研究の知見を取り入れた方法論研究の進展によって、情動的要因といった国際政治の要因にまで分析射程は広がっている。また国際政治の要因として重要なものに利益認識の変化がある。利益認識の変化に着目したプロスペクト理論研究は未発展であるが、今後の研究の進展によって、プロスペクト理論は利益認識の変化を分析対象にできる可能性がある。なぜならプロスペクト理論の価値関数を規定する価値は物質的・観念的な効用を表す。物質的・観念的な効用は国際政治学における利益（たとえば、国益）に置き換えられる。それゆえプロスペクト理論は利益認識の変化をドメインの変化（価値が獲得と損失のいずれの状態におかれているかに関する認識）という形で分析できる。第二に限界に関しては、第五章で指摘したようにリスク傾向性への個体差の影響の問題が挙げられる。リスク傾向性には個体差が影響を及ぼしているため、プロスペクト理論の予測能力には限界がある。またプロスペクト理論から逸脱したリスク傾向性を示す強力な個性をもつ政策決定者へプロスペクト理論は適用

できない。第三に課題に関しては、第四章で指摘したようにプロスペクト理論を国際政治分析に適用する際に、どのようにして簡潔性と説明力のトレードオフの問題に対処するのか、という点が挙げられる。先述したタリアフェロのモデルが示すように、分析アクターの価値を規定する際に物質的要因だけでなく観念的要因も使用することで説明力が高まる。しかし、説明力を高めるために複雑な観念的要因を使用することで分析視角の簡潔性が損なわれる。それゆえ、簡潔性と説明力の問題に折り合いをつけることが今後の課題である。

(二) 研究を進める三つの方向性

国際政治学におけるプロスペクト理論研究は情動をはじめとする最新の実験研究の知見を取り入れることで、政策決定者の意思決定をより現実的に分析することが可能になる。もちろん、実験研究の成果を活用すること以外にも今後の研究の用途はある。それゆえ、本稿では幅広い観点からその他の方法も検討して、今後の研究の可能性を三つに大別して示したい。⁽⁹⁾

第一は、プロスペクト理論が心理学実験の知見である点を逆手にとって、情動的要因をはじめとする実験研究の成果を、国際政治学におけるプロスペクト理論研究に活用することである。従来、自然科学の実験研究の知見（オリジナルのプロスペクト理論を含めて）を、国際政治分析に適用することは、外的妥当性の問題としてネガティブに論じられてきた。しかし、近年の実験研究は、むしろ、国際政治分野のプロスペクト理論研究の分析射程をおし広げるための有益な知見を創出している。

はじめに、情動的要因をはじめとする神経生理学の知見は、フレーミング理論の欠如という方法論的問題に新たな解決方法を提示する⁽¹⁰⁾。先述のようにフレーミング理論の欠如とは、統制された実験室とは異なり現実世界ではドメインの推定が困難であるという問題である。従来、ドメインの推定は基準となる観察対象を欠くために困難であった。

たとえば、意思決定者の発言を吟味する発言分析を行う際に具体的にどのような発言内容が、獲得・損失のドメインを表現しているのか、に関して明確な基準があるわけではない。このような方法論研究の問題に対して、感覚という情動的要因がドメインを決定するという神経生理学の知見は、ドメインの推定の際に意思決定者が示す感覚を観察対象の基準にするという解決方法を提示する。すなわち、情動的要因をはじめとする実験研究の進展を取り入れることによって、これまで分析が困難であったドメインの推定が観察対象に関する一般的な基準が得られることで容易になるのである。さらに、この方法は実験研究の結果に裏付けられているため、研究者はドメインの推定を従来よりも経験的信頼性を兼ね備えた形で行えるようになる。メーサーはプロスペクト理論のリスク傾向性に影響を与える感覚という情動が、人間の合理的な判断に必要であると論じる。⁽⁹²⁾人々は感覚を通じて効用を得る。人間のリスク傾向性は事象の客観的な性質ではなく、ドメインに関する主観的な感覚によって異なるのである。また、感覚に基づくドメインの推定は、より直接的な意思決定の分析を可能にするため、事例解釈の妥当性が向上する。ただし、具体的にどのような感覚（喜び、苦しみ、信頼、疑念など）が意思決定者のドメインを決定するのか、に関する研究はいまだ発展途上である。それゆえ、研究者は分析対象とする感覚を慎重に選択する必要がある。

また、進化心理学の実験研究は方法論研究の進展に寄与する。これまで、研究者は、プロスペクト理論が合理主義パラダイムと心理学パラダイムのどちらに属するのか、に関して議論を繰り広げてきた。⁽⁹³⁾進化心理学の実験研究の知見はこの方法論論争を緩和する視角を提示する。マクデーモットは二つの理由から、損失のドメインにおいてリスクを受け入れる行動が人間にとっての最適行動であると示唆する。人間は進化の過程で、①資源の希少性が変動的な環境下で、②自助の可能性を極大化するように試みてきた。⁽⁹⁴⁾リスク傾向性に関する進化心理学の知見は、国際政治学者が繰り広げてきた、プロスペクト理論が帰属するパラダイムに関する論争に、進化論の観点から最適性という新たな分析視角を提示する。このような研究は合理的選択理論家と政治心理学者の間に、生産的な対話の機会をもたらすだ

ろう。

もちろん、実験研究の成果を活用することだけが、今後の研究の方向性というわけではない。さらに、以下の二つの方途が重要となるだろう。すなわち、第二の方法は、国際政治の記述的推論を洗練していくことである。プロスペクト理論がもつ心理学的な意思決定論としての特性は、定性研究に多様な分析視角をもたらす。その際、以下の三つの方法が重要である。一つ目はオリジナルのプロスペクト理論の概念（損失回避、フレイミング効果、選好逆転など）を事例に直接適用する方法である。主な例にはルーズベルトの政策転換⁽⁹⁵⁾、イラン人質救出作戦⁽⁹⁶⁾の研究がある。この方法を採用する際には心理学実験の知見であるプロスペクト理論を、異なる分野である国際政治分野に直接適用することの方法論的な妥当性に関して留意する必要がある。二つ目はプロスペクト理論を他の理論と融合する方法である。

主な例にはタリアフェロによる、リアリズムと期待水準理論とプロスペクト理論を融合したリスク均衡理論⁽⁹⁷⁾、ウエルチ (David A. Welch) によるプロスペクト理論、動機心理学、組織理論を融合した外交政策理論⁽⁹⁸⁾がある。この方法は一つ目の方法の問題点である、プロスペクト理論を国際政治分野に直接適用することの方法論的妥当性の問題を克服するための解決策になりえる。さらに多様な理論的エッセンスの融合を通じて、より大胆かつ新奇的な仮説を提示できる。しかし、プロスペクト理論と融合可能な理論に関する一般的な基準がない点が難点といえる。三つ目は事例解釈のためオリジナルのプロスペクト理論の論理を大幅に修正する方法である。主な例にはルボウによる動機とコンテキストを取り入れたプロスペクト理論研究がある⁽⁹⁹⁾。この方法の問題点はオリジナルのプロスペクト理論の論理をどの程度まで修正することが方法論的に許容可能か、という点にある。研究に際しては事例解釈の妥当性と方法論的な厳格性のトレードオフに留意する必要があるだろう。

第三は、国際政治の数理研究をおし進めることである。これは戦略的相互作用をはじめとするフォーマル・モデル研究を進展させるものである。プロスペクト理論研究は国家行動と国家間相互作用に関する定量分析を通じて、期待

効用理論のみならずゲーム理論と比較が可能になる。この方法の問題点はプロスペクト理論の認知心理学的な特性が軽視される点にある。プロスペクト理論は帰結のみならず意思決定過程も重視しており、意思決定における価値・確率の主観的問題を分析対象としている。また現実の政策決定では、確率に関する評価は客観的な値ではなく主観的な評価で修正される。数値分析がこれらの心理的諸問題をどの程度考察可能かに関しては検討の余地がある。

七 おわりに

本稿では、国際政治学におけるプロスペクト理論研究の理論・方法論的問題を再考察して、今後の研究の可能性を示した。第二章ではプロスペクト理論の概要、第三章では国際政治学におけるプロスペクト理論研究の歴史を説明した。第四章では国際政治理論研究への含意、第五章では方法論的問題を批判的に再検討した。第六章では第五章までの議論を踏まえて、国際政治研究におけるプロスペクト理論の分析射程の範囲を論じた。さらに、近年の情動をはじめとする実験研究の成果を踏まえて、今後の研究の可能性を多角的に考察した。最後に本研究の含意と今後の研究課題を述べて本稿を終えたい。

本論の主な含意は学問分野としての政治心理学にある。本研究では理論・方法論的問題の再検討を通じて、主として外的妥当性の問題を分析したが、この問題はプロスペクト理論のみならず、政治心理学全般に対してしばしば批判として挙げられる方法論的問題である。⁽¹⁰⁾ それゆえ、国際政治研究の一つのアプローチとして政治心理学が発展していくためには、今後、プロスペクト理論以外の理論——たとえば、過信 (overconfidence) ⁽¹¹⁾——に関しても同様の考察が必要となろう。

本研究の今後の課題はプロスペクト理論をもとに、情動的要因を取り入れた予防戦争のネオクラシカル・リアリズム

ム理論の構築を通じて第一次世界大戦におけるドイツの外交政策を再検討することにある。これには三つの相互に関連する目的がある。第一に、情動的要因の使用を通じて、先述した予防戦争理論家が繰り広げる合理主義パラダイムと心理学パラダイムの間の論争を緩和することである。第二に、第一次世界大戦に関する新たな資料の発見により、理論の信憑性を問いただされているネオリアリズムを、プロスペクト理論の概念を国内要因として導入することで、ネオクラシカル・リアリズムとして再構築することである^(四)。第三に、その際の事例検証に際して、第一次世界大戦を研究することで、同戦争の起源に関する理論・歴史論争を緩和するための新たな分析視角を提示することである^(五)。今後の国際政治学におけるプロスペクト理論研究は情動的要因を取り入れることで、これまでの研究で明らかにされていない新たな知見を得ることができるところであろう。

- (1) プロスペクト理論を国際政治研究に適用することへの批判については、Dale C. Copeland, "Theory and History in the Study of Major War," *Security Studies*, Vol. 10, No. 4 (2001), pp. 216-220. を参照。
- (2) Rose McDermott, *Political Psychology in International Relations* (Ann Arbor: University of Michigan Press, 2004), pp. 268-270.
- (3) 国際関係論一般における実験的手法の重要性については、A. Mintz, Y. Yang, and R. McDermott, "Experimental Approaches to International Relations," *International Studies Quarterly*, Vol. 55, No. 2 (2011), pp. 493-501. を参照。
- (4) Jonathan Mercer, "Emotional Beliefs," *International Organization*, Vol. 64, No. 1 (2010), pp. 17-19; Max H. Bazerman and Don A. Moore, *Judgment in Managerial Decision Making* (Hoboken, NJ: John Wiley & Sons, 2009), pp. 7, 9-10, 14, 85; R. McDermott, J. H. Fowler, and O. Sminov, "On the Evolutionary Origin of Prospect Theory Preferences," *Journal of Politics*, Vol. 70, No. 2 (2008), pp. 335-350; J. N. Druckman and R. McDermott, "Emotion and the Framing of Risky Choice," *Political Behavior*, Vol. 30, No. 3 (2008), pp. 297-321.
- (5) たぶん、B. Vis は、プロスペクト理論が示す人間行動の傾向は進化的な起源をもちと論じている。B. Vis, "Prospect

Theory and Political Decision Making," *Political Studies Review*, Vol. 9, No. 3 (2011), pp. 334-343. 本稿ではビンスの主張を取り入れたことも、同論文で取り上げられていないさまざまな問題の考察を通じて議論を拡張することにより、より包括的な分析を行った。

(6) 本稿では紙幅および研究目的を鑑みて諸論点を網羅するのではなく、むしろ、主な理論・方法論的問題を掘り下げて分析したい。それゆえ、本文で論じていない問題に関しては以下の先行研究を参照された。Jack S. Levy, "Prospect Theory, Rational Choice, and International Relations," *International Studies Quarterly*, Vol. 41, No. 1 (1997), pp. 87-112; Jeffrey W. Taliaferro, *Balancing Risks: Great Power Intervention in the Periphery* (Ithaca, N.Y.: Cornell University Press, 2004); Rose McDermott, *Risk-Taking in International Politics: Prospect Theory in American Foreign Policy* (Ann Arbor: University of Michigan Press, 1998); Yaacov Vertzberger, *Risk Taking and Decisionmaking: Foreign Military Intervention Decisions* (Stanford: Stanford University Press, 1998); Barbara Farnham, *Avoiding Losses/Taking Risks: Prospect Theory and International Conflict* (Ann Arbor: University of Michigan Press, 1994); 土山實男「安全保障の国際政治学——焦りと驕り」(有斐閣「二〇〇四」一四三—一七二頁、久保田徳仁「プロスペクト理論の国際政治分析への適用——理論および方法論の観点からみた現状と課題」『防衛大学校紀要』社会科学分冊、第九二号、二〇〇六年三月、一—二四頁。

(7) プロスペクト理論を国際政治研究に導入することの妥当性は、内的妥当性 (internal validity)、外的妥当性 (external validity) の二つに大別される。前者は、「実験室において観察された行動が、他の諸要因ではなく、プロスペクト理論の仮説化された効果に由来することに自信を持つるか否か」、後者は「実験的知見を現実世界に一般化することができるか否か」を意味する。Levy, "Prospect, Theory, Rational Choice, and International Relations," p. 88. また内的妥当性は「ある事例群から導き出した記述的あるいは因果的推論が、これらの事例に当てはまる度合い」、外的妥当性は「ある一群の事例に対する記述的・因果的推論が、ほかの事例にも当てはまる度合い」であり汎用性とも定義される。前者に関しては、ヘンリー・ブレイディ、デヴィッド・コリアー編『社会科学の方法論争——多様な分析道具と共通の基準』(泉川泰博・宮下明聡訳) (勁草書房、二〇〇八) 三三五頁、後者に関しては、同書、三二二頁を参照。

(8) R. McDermott, "Prospect Theory in Political Science: Gains and Losses from the First Decade," *Political Psychology*, Vol. 25, No. 2 (2004), pp. 306-307.

(9) D. Kahneman and A. Tversky, "Prospect Theory: Analysis of Decision under Risk," *Econometrica*, Vol. 47, No. 2 (1979), pp.

263-291.

- (10) D. Kahneman and A. Tversky, "Prospect Theory: Analysis of Decision under Risk," pp. 284-285.
- (11) A. Tversky and D. Kahneman, "Loss Aversion in Riskless Choice: a Reference-Dependent Model," *Quarterly Journal of Economics*, Vol. 106, No. 4 (1991), p. 1039.
- (12) 利用可能性ヒューリスティクスとは、ある出来事が起こる可能性を考える際に、最近の事例や以前の顕著な事例など想起が容易な事例や特徴を思い出して、判断の基準にすることを意味する。
- (13) 代表性ヒューリスティクスとは、典型的と思われるものを判断の基準として利用することを意味する。
- (14) アンカリング効果とは、最初に印象に残った問題が、後の判断に影響を及ぼすことを意味する。
- (15) Daniel Kahneman, Paul Slovic, and Amos Tversky, *Judgment under Uncertainty: Heuristics and Biases* (Cambridge: Cambridge University Press, 1982); A. Tversky and D. Kahneman, "Judgment under Uncertainty: Heuristics and Biases," *Science*, Vol. 185, No. 4157 (1974), pp. 1124-1131. 以下、本稿では「heuristics」をヒューリスティクスと訳す。ヒューリスティクスとは、必ず正解が得られるわけではないが、近似解が期待できる方法の意味する。これは、意思決定者の外的環境の情報評価に関する簡略化の方法であり、また、情報評価に体系的なバイアスをかける役割を果たす。ヒューリスティクスの活用によって、回答に至るまでの時間を短縮できる。この用語は主に心理学と計算機科学の分野で用いられて、前者では人間の思考方法、後者ではプログラミングの方法を示す。ヒューリスティクスに関する研究は、一九七四年のカーネマンとトヴェルスキーの初期の論文の後に、「ヒューリスティクスとバイアス研究」として進展して多様な概念を生み出した。近年では情動的な評価が人間の判断に影響を及ぼすという感情ヒューリスティクス (affect heuristics) の研究が進展している。
Max H. Bazerman and Don A. Moore, *Judgment in Managerial Decision Making*.
- (16) Kahneman and Tversky, "Prospect Theory: Analysis of Decision under Risk," p. 286.
- (17) 以下本稿では価値関数の獲得と損失に関する領域のことをドメイン (domain) と記す。
- (18) *Ibid.*, p. 268.
- (19) A. Tversky and D. Kahneman, "Loss Aversion in Riskless Choice: a Reference-Dependent Model," pp. 1039-1069.
- (20) Daniel Kahneman, Jack L. Knetsch, and Richard H. Thaler, "Anomalies: The Endowment Effect, Loss Aversion, and Status Quo Bias," *The Journal of Economic Perspectives*, Vol. 5, No. 1 (1991), pp. 193-286; Daniel Kahneman, Jack L. Knetsch, and

- Richard H. Thaler, "Experimental Tests of the Endowment Effect and the Coase Theorem," *Journal of Political Economy*, Vol. 98, No. 6 (1990), pp. 1325-1348.
- (21) *Ibid.*, pp. 1325-1348.
- (22) A. Tversky and D. Kahneman, "Loss Aversion in Riskless Choice: a Reference-Dependent Model," p. 1041.
- (23) *Ibid.*, pp. 1048-1050.
- (24) Kahneman and Tversky, "Prospect Theory: Analysis of Decision under Risk," p. 279.
- (25) ノーミナル効果とは、論理的には同じ値であっても選択肢の表現の違いが人々の選好に影響を及ぼす現象を意味する。
- (26) Paul Slovic and Sarah Lichtenstein, "Preference Reversals: A Broader Perspective," *The American Economic Review*, Vol. 73, No. 4 (1983), pp. 596-605.
- (27) A. Tversky and D. Kahneman, "Advances in Prospect-Theory: Cumulative Representation of Uncertainty," *Journal of Risk and Uncertainty*, Vol. 5, No. 4 (1992), p. 311.
- (28) *Ibid.*, p. 313.
- (29) A. Tversky and D. Kahneman, "Rational Choice and the Framing of Decisions," *Journal of Business*, Vol. 59, No. 4 (1986), pp. 265-267; G. A. Quattrone and A. Tversky, "Contrasting Rational and Psychological Analyses of Political Choice," *American Political Science Review*, Vol. 82, No. 3 (1988), pp. 731-732.
- (30) 「の特集中の論文は」 Barbara Farnham, *Avoiding Losses: Prospect Theory and International Conflict* (Ann Arbor: University of Michigan Press, 1994). 249-251p.
- (31) Levy, "Prospect Theory, Rational Choice, and International Relations."
- (32) R. McDermott, "Prospect-Theory in International-Relations: the Iranian Hostage Rescue Mission," *Political Psychology*, Vol. 13, No. 2 (1992), pp. 237-263.
- (33) 「の心」 本・本の論争の概要に關しては、Joseph M. Grieco, "Anarchy and the Limits of Cooperation: A Realist Critique of the Newest Liberal Institutionalism," *International Organization*, Vol. 42, No. 3 (1988), pp. 485-507. を参照。
- (34) Jeffrey D. Berjelian, "The Gains Debate: Framing State Choice," *American Political Science Review*, Vol. 91, No. 4 (1997), pp. 789-805.

- (35) Jeffrey W. Taliaferro, "Power Politics and the Balance of Risk: Hypotheses on Great Power Intervention in the Periphery," *Political Psychology*, Vol. 25, No. 2 (2004), pp. 177-211.
- (36) Michael D. Kanner, "Framing and the Role of the Second Actor: An Application of Prospect theory to Bargaining," *Political Psychology*, Vol. 25, No. 2 (2004), pp. 213-216. 々の後のトロムベント理論による戦略的相互作用のニューベル研究の発展に關つては、Christopher K. Butler, "Prospect Theory and Coercive Bargaining," *Journal of Conflict Resolution*, Vo. 51, No. 2 (2007), pp. 227-250. を参照。
- (37) Gary Schaub Jr., "Deterrence, Compellence, and Prospect Theory," *Political Psychology*, Vol. 25, No. 3 (2004), pp. 389-411.
- (38) 集合問題とは、個人を分析対象として行われた実験により得られた仮説を国家とつら集團単位に適用する際の妥当性に関する問題である。Levy, "Prospect Theory, Rational Choice, and International Relations," pp. 102-104.
- (39) R. McDermott, "Prospect Theory in Political Science," pp. 289-312.
- (40) James W. Davis, *Threats and Promises: The Pursuit of International Influence* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2000).
- (41) D. K. Elms, "Large Costs, Small Benefits: Explaining Trade Dispute Outcomes," *Political Psychology*, Vol. 25, No. 2 (2004), pp. 241-270; M. Fanis, "Collective Action Meets Prospect Theory: An Application to Coalition Building in Chile, 1973-75," *Political Psychology*, Vol. 25, No. 3 (2004), pp. 363-388.
- (42) Berjikian, "The Gains Debate."
- (43) McDermott, "Prospect Theory in Political Science," pp. 304-305. この問題は第五章で改めて分析した。
- (44) Jonathan Mercer, "Prospect Theory and Political Science," *Annual Review of Political Science*, Vol. 8 (2005), pp. 1-21.
- (45) Richard Ned Lebow, *A Cultural Theory of International Relations* (Cambridge: Cambridge University Press, 2008), pp. 365-368. を参照。
- (46) メーサーは感覚を「情動を経験しつつあるとつら顕著な自覚」と定義する。Mercer, "Emotional Beliefs," p. 3.
- (47) Ibid.
- (48) ネオクラシカル・リアリズムとは、国際システムの制約を独立変数、国内要因を媒介変数に設定して、国家の対外行動を従属変数とするリアリスト理論である。Steven E. Lobell, Norrin M. Ripsman, and Jeffrey W. Taliaferro, *Neoclassical Real-*

- ism, *the State, and Foreign Policy* (Cambridge: Cambridge University Press, 2009).
- (49) Kai He and Huiyun Feng, *Prospect Theory and Foreign Policy Analysis in the Asia Pacific: Rational Leaders and Risky Behavior* (New York: Routledge, 2013).
- (50) *Ibid.*, p. 10.
- (51) Kai He and Huiyun Feng, “Why Is There No NATO in Asia? Revisited: Prospect Theory, Balance of Threat, and US Alliance Strategies,” *European Journal of International Relations*, Vol. 18, No. 2 (2012), pp. 227–250.
- (52) Taliaferro, *Balancing Risks*.
- (53) Stephen M. Walt, *The Origins of Alliances* (Ithaca: Cornell University Press, 1987).
- (54) Kenneth N. Waltz, *Theory of International Politics* (Reading, Mass.: Addison-Wesley, 1979).
- (55) He and Feng, “Why Is There No NATO in Asia? Revisited,” pp. 235–237.
- (56) Taliaferro, *Balancing Risks*, pp. 37–39.
- (57) *Ibid.*, pp. 22–26.
- (58) *Ibid.*, p. 22.
- (59) *Ibid.*, pp. 26–27.
- (60) *Ibid.*, p. 41.
- (61) Norrin M. Ripsman and Jack S. Levy, “The Preventive War That Never Happened: Britain, France, and the Rise of Germany in the 1930s,” *Security Studies*, Vol. 16, No. 1 (2007), pp. 35–38. それにも関わらず、予防戦争に関する定義も存在する。たとえば、予防戦争は「軍事的衝突が差し迫っているはいるが不可避であり、遅れると一層重大な危険を招くと信じて開始される戦争」と定義される。赤木完爾「第十三章 核兵器と朝鮮戦争——予防戦争と自己抑制の間——赤木完爾編著『朝鮮戦争——休戦五〇周年の検証・半島の内と外から』（慶應義塾大学出版会、二〇〇三）、三五六頁。
- (62) Dale C. Copeland, *The Origins of Major War* (Ithaca: Cornell University Press, 2000).
- (63) Jeffrey W. Taliaferro, “Realism, Power Shifts, and Major War,” *Security Studies*, Vol. 10, No. 4 (2001), pp. 145–178.
- (64) Jack Snyder, “Correspondence: Defensive Realism and the ‘New’ History of World War I,” *International Security*, Vol. 33, No. 1 (2008), pp. 177–178.

- (65) Stephen Van Evera, *Causes of War: Power and the Roots of Conflict* (Ithaca: Cornell University Press, 1999), p. 76.
- (66) Jack S. Levy, "Declining Power and the Preventive Motivation for War," *World Politics*, Vol. 40, No. 1 (1987), p. 87.
- (67) Thomas C. Schelling, *Arms and Influence* (New Haven: Yale University Press, 1966), pp. 69-91.
- (68) *Ibid.*, chap. 2.
- (69) Taliaferro, *Balancing Risks*, pp. 40-52.
- (70) Levy, "Prospect Theory, Rational Choice, and International Relations," pp. 102-104.
- (71) M. Fuhrmann and B. R. Early, "Following Start: Risk Acceptance and the 1991-1992 Presidential Nuclear Initiatives," *Foreign Policy Analysis*, Vol. 4, No. 1 (2008), pp. 21-23.
- (72) Chaim D. Kaufmann, "Out of the Lab and into the Archives: A Method for Testing Psychological Explanations of Political Decision Making," *International Studies Quarterly*, Vol. 38, No. 4 (1994), pp. 561-562.
- (73) W. A. Boetcher, "The Prospects for Prospect Theory: An Empirical Evaluation of International Relations Applications of Framing and Loss Aversion," *Political Psychology*, Vol. 25, No. 3 (2004), pp. 332-333.
- (74) A. Tversky and D. Kahneman, "The Framing of Decisions and the Psychology of Choice," *Science*, Vol. 211, No. 4481 (1981), p. 453.
- (75) Levy, "Prospect Theory, Rational Choice, and International Relations," p. 89.
- (76) McDermott, *Risk-Taking in International Politics*, pp. 37-38.
- (77) R. McDermott and J. Kugler, "Comparing Rational Choice and Prospect Theory Analyses: The US Decision to Launch Operation 'Desert Storm', January 1991," *Journal of Strategic Studies*, Vol. 24, No. 3 (2001), pp. 49-85.
- (78) Elhms, "Large Costs, Small Benefits," p. 249.
- (79) Franis, "Collective Action Meets Prospect Theory," pp. 363-388.
- (80) M. Mastanduno, "Framing the Japan Problem: the Bush administration and the Structural Impediments Initiative," in Louis W. Pauly and Janice Gross Stein, ed., *Choosing to Co-Operate: How States Avoid Loss* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1993), pp. 35-64.
- (81) D. Spar, "Co-developing the FSX Fighter: the Domestic Calculus of International Cooperation," in *ibid.*, pp. 35-64.

- (82) Davis, *Threats and Promises*, p. 113.
- (83) Taliadro, *Balancing Risks*, pp. 62, 92.
- (84) Yacov Vertzberger, *The World in Their Minds: Information Processing, Cognition, and Perception in Foreign Policy Decisionmaking* (Stanford, Calif.: Stanford University Press, 1990), pp. 192-259.
- (85) Copeland, "Theory and History in the Study of Major War," pp. 216-218.
- (86) 集団極性化 (group polarization) と呼ばれる現象は、リスクを受け入れる人々が多数を占める集団がよりリスクを受け入れるように、リスクを回避する傾向を示す人々が多数を占める集団がよりリスクを回避することを示す。Arieli S. Levi and Glen Whyte, "A Cross-Cultural Exploration of the Reference Dependence of Crucial Group Decisions under Risk: Japan's 1941 Decision for War," *Journal of Conflict Resolution*, Vol. 41, No. 6 (1997), p. 802. それに対してホッチャーは実験研究の知見から集団思考はメンバーとは無関係にメンバーにリスクを受け入れるようにむかわせると指摘している。Boettcher III, "The Prospects for Prospect Theory," p. 354.
- (87) Vis, "Prospect Theory and Political Decision Making," p. 338.
- (88) Robert Jervis, *Perception and Misperception in International Politics* (Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1976).
- (89) 近年では国際政治のみならず比較政治とつった学問領域でも、プロスペクト理論を用いた研究が進展している。Vis, "Prospect Theory and Political Decision Making."
- (90) 本稿で論じる①実験研究の成果の活用、②記述的推論の洗練、③推理研究の推進という三つの可能性は先行研究において個別的に指摘されてきた主張の諸要素を体系的に再検討して、理念型として提示することを意図したものである。
- (91) Mercer, "Emotional Beliefs."
- (92) Ibid. の主張はたぶん、ダマシオ (Antonio R. Damasio) にちなみ、意思決定における大脳前頭前野の機能に関する脳科学の実験研究に裏付けられる。Antonio R. Damasio, *The Feeling of What Happens: Body and Emotion in the Making of Consciousness* (New York: Harcourt Brace, 1999).
- (93) たぶん、Levy, "Prospect, Theory, Rational Choice, and International Relations"; 久保田、前掲論文、一五—一八頁、を参照。
- (94) McDermott, "On the Evolutionary Origin of Prospect Theory Preferences."

- (95) B. Farnham, "Roosevelt and the Munich Crisis: Insights from Prospect-Theory," *Political Psychology*, Vol. 13, No. 2 (1992), pp. 205-235.
- (96) McDermott, "Prospect-Theory in International-Relations: the Iranian Hostage Rescue Mission."
- (97) Taliadro, *Balancing Risks*.
- (98) David A. Welch, *Painful Choices: A Theory of Foreign Policy Change* (Princeton, N.J.: Princeton University Press, 2005).
- (99) Lebow, *A Cultural Theory of International Relations*.
- (100) McDermott, *Political Psychology in International Relations*, p. 12.
- (101) 過信は「帰結に関する実際の確率を凌駕する自信の次元」と定義される。Dominic D.P. Johnson and Dominic Tierney, "The Rubicon Theory of War: How the Path to Conflict Reaches the Point of No Return," *International Security*, Vol. 36, No. 1 (2011), p. 9.
- (102) Keir A. Lieber, "The New History of World War I and What It Means for International Relations Theory," *International Security*, Vol. 32, No. 1 (2008), pp. 155-191.
- (103) William Mulligan, *The Origins of the First World War* (Cambridge: Cambridge University Press, 2010); Annika Mombauer, *The Origins of the First World War: Controversies and Consensus* (London: Longman, 2002).

伊藤 隆太 (いとう りゅうた)

所属・現職

慶應義塾大学大学院法学研究科後期博士課程

最終学歴

慶應義塾大学大学院法学研究科前期博士課程

所属学会

国際安全保障学会

専攻領域

国際関係理論、国際安全保障、政治心理学